

「新大分スタンダード」



社会の変化は加速度を増し、平成28年答申で示された通り、複雑で予測困難な状況になっています。これからの時代を生きる子どもたちには、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながらどのような未来を創っていくのか、どのように人生をよりよいものにしていくのかを主体的に考えたり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくことが求められます。

一方で、時代の変化という「流行」の中で、未来を切り拓くための力の基盤は、学校教育の中で長年大切にされてきた「不易」によって育まれています。本県では、全ての子どもたちが、授業を通して、「わかった」「できた」を実感するための授業づくりに不可欠な視点を「新大分スタンダード」に示すとともに、それに基づいた授業改善に取り組んでいます。

【目次】

(はじめに)

今、求められる授業改善 ……1～2

1 【理論編】

・「新大分スタンダード」の4つの視点について
詳しく説明しています ……3～14

2 【実践編】

・「新大分スタンダード」に基づいた実践について
具体例を交えて説明しています ……15～20

今、求められる授業改善

社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となってきており、しかもそうした変化が、どのような職業や人生を選択するかにかかわらず、全ての子供たちの生き方に影響するものとなっている。 (中央教育審議会答申より H28.12.21)

これからの子供たちは、社会が急激に変化し、その変化が予測できない中において、「正解」のない問いにも果敢に取り組みながら、未来を自ら切り拓いていくことが求められる。

(「義務教育の在り方ワーキンググループ中間まとめ」より R5.12.28)



直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、主体的に学び続けて自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくために必要な力を身に付け、子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である。 (中央教育審議会答申より H28.12.21)



変化を見通せないこれからの時代において、新しい社会の在り方を自ら創造することができる資質・能力を子供たちに育むためには、教員自身が習得・活用・探究という学びの過程全体を見渡し、個々の内容事項を指導することによって育まれる資質・能力を自覚的に認識しながら、子供たちの変化等を踏まえつつ自ら指導方法を不断に見直し、改善していくことが求められる。

(中央教育審議会答申より H28.12.21)

主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善

主体的な学び を実現するために・・・

子ども自身が**興味をもって積極的に取り組む**とともに、**学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したり**することが重要

対話的な学び を実現するために・・・

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、**教員と子どもや、子ども同士が対話し、それによって思考を広げ深めていく**ことが求められる

深い学び を実現するために・・・

各教科等の学びの過程の中で、**身に付けた資質・能力の三つの柱を活用・発揮しながら物事を捉え思考する**ことを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要

分かりやすく具現化



新大分スタンダード R5年3月版

「学びに向かう力」と「思考力・判断力・表現力」を育成するワンランク上の授業を目指して

1 1時間完結型

- *学習の見通しをもたせ、意欲を高める「めあて」
- *学びの成果を実感し、学んだことや意欲・問題意識等を次につなげる「振り返り」
- *追究すべき事柄を明確にする「課題」、追究した結果を明確にする「まとめ」

2 板書の構造化

- *思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書

3 習熟の程度に応じた指導

- *「具体的な評価規準」に基づく確かな見取り
- *「努力を要する状況」の児童生徒に対する手立ての工夫



4 生徒指導の3機能を意識した問題解決的な展開

- *各教科等の見方・考え方を働かせて展開する「課題設定 → 情報収集 → 整理・分析 → まとめ・表現・交流 → 振り返り・評価」等の学習過程の繰り返しの中で行われる
- ・知識の関連付け、問題の発見・解決、情報を精査した考えの形成、思いや考えに基づく創造
- ・様々な人との対話・協働による自分の考えの深化・拡充

育成すべき資質・能力を見据え、授業の「ねらい」に即したICT活用

子ども主体の学びを支援
情報活用能力の育成

ICTの効果的な活用

- *各教科等の特質や学習過程を踏まえた活用
- *子どもの学びを広げ、深める活動で活用(思考の可視化、意見交流、学習の記録等)
- *子どもの興味・関心、実態に応じた活用



大分県では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めるために必要な視点を、「**新大分スタンダード**」に位置付けています。



【理論編】



【理論編】では、「新大分スタンダード」に示す4つの視点について、詳しく説明しています。まずは、【理論編】の内容を理解し、日々の授業改善につないでいくことが大切です。

新大分スタンダード

R5年3月版

「学びに向かう力」と「思考力・判断力・表現力」を育成するワンランク上の授業を目指して

1_1 時間完結型

- *学習の見通しをもたせ、意欲を高める「めあて」
- *学びの成果を実感し、学んだことや意欲・問題意識等を次につなげる「振り返り」
- *追究すべき事柄を明確にする「課題」、追究した結果を明確にする「まとめ」

2_板書の構造化

- *思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書

3_習熟の程度に応じた指導

- *「具体的な評価規準」に基づく確かな見取り
- *「努力を要する状況」の児童生徒に対する手立ての工夫

4_生徒指導の3機能を意識した問題解決的な展開

- *各教科等の見方・考え方を働かせて展開する「課題設定 → 情報収集 → 整理・分析 → まとめ・表現・交流 → 振り返り・評価」等の学習過程の繰り返しの中で行われる
- ・知識の関連付け、問題の発見・解決、情報を精査した考えの形成、思いや考えに基づく創造
- ・様々な人との対話・協働による自分の考えの深化・拡充



育成すべき資質・能力を見据え、授業の「ねらい」に即したICT活用

子ども主体の学びを支援
情報活用能力の育成

ICTの効果的な活用

- *各教科等の特質や学習過程を踏まえた活用
- *子どもの学びを広げ、深める活動で活用(思考の可視化、意見交流、学習の記録等)
- *子どもの興味・関心、実態に応じた活用



「新大分スタンダード」では、主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善に必要な視点として、

1_1 時間完結型

2_板書の構造化

3_習熟の程度に応じた指導

4_生徒指導の3機能を意識した問題解決的な展開

の4つを示しています。

また、4つの視点に基づいた授業改善の取組を進める手立てとして、

〔ICTの効果的な活用〕が考えられます。なお、〔ICTの効果的な活用〕は、児童生徒の資質・能力の育成を目指す観点から検討することが大切です。

「新大分スタンダード」は、教科一律の授業の型を示しているものではありません。



授業づくりでは、習得すべき事柄を明確にするとともに、それらを確実に習得させるため、以下について、それぞれの教師がじっくりと考えることが重要です。

- 単元のまとまりを見通して、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組立てるか
- 対話によって各自の考えを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか

このことは、「新大分スタンダード」に基づいた授業改善も同様に当てはまります。

「新大分スタンダード」には、授業改善に必要な4つの視点が示してありますが、その具体については、それぞれの教師が、目の前の児童生徒の実態や、教科・教材等の特質に合わせて考える必要があります。

つまり、「新大分スタンダード」は、型どおりの指導の徹底を求めているものではないのです。





ここからは、「新大分スタンダード」に示す4つの視点について、それぞれ確認していきましょう。

1_1 時間完結型

- *学習の見通しをもたせ、意欲を高める「**めあて**」
- *学びの成果を実感し、学んだことや意欲・問題意識等を次につなげる「**振り返り**」
- *追究すべき事柄を明確にする「**課題**」、追究した結果を明確にする「**まとめ**」

また、本解説2ページに示した「主体的な学び」と「新大分スタンダード」に示す「1時間完結型」との関わりは、次のように整理できます。

主体的な学び

新大分スタンダード

興味をもって積極的に
取り組む



学習の見通しをもたせ、
意欲を高める

めあて

追究すべき事柄を
明確にする

課題

身に付いた資質・能力を
自覚したり共有したりする



追究した結果を
明確にする

まとめ



学習活動を自ら振り返り
意味付ける



学びの成果を実感し、
次につなげる

振り返り



「新大分スタンダード」では、「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の4つの要素全てが毎時間必要だとはしていません。

各要素は、単元の指導計画に基づき、1単位時間の役割や位置付けを明確にして設定することが大切です。

めあて と 課題

例えば、単元を見通した「めあて」を設定し、本時の授業が開始される前からその「めあて」が子どもたちに意識されているのであれば、確認するだけでよい場合もあります。

また、「めあて」を設定した後、発問等によって「めあて」を具体化し追究する事柄を明確にしていけば、改めて「課題」として設定しなくてよい場合もあります。

まとめ

「課題」を設定したときには、答えを明確にする必要があるので、「まとめ」が必要になります。ただし、多様な見方や考え方を求めるような授業などでは、1つに収束するような「まとめ」ではなく、いくつかの見方や考え方を整理するような「まとめ」となることも考えられます。

振り返り

1単位時間で設定される「振り返り」は、単元の指導計画における位置付けにより、短時間で行う簡潔な「振り返り」や時間を十分にかける「振り返り」等、さまざまな場合が考えられます。

「新大分スタンダード」に基づいた授業改善について、次のような困りや悩みを聞くことがあります。

「めあて」と「課題」が同じような内容になってしまう…。



まずは、以下を確認しましょう。

めあて

- ・ 付けたい力を身に付けた児童生徒の「ゴールの姿」や「ゴールとそれまでの道筋」等を示したもの。
- ・ 「単元のめあて」や「本時のめあて」を、単元の指導計画を踏まえ適宜設定する。

課題

- ・ 児童生徒が追究することによって、資質・能力の育成につながる具体的な事柄。
- ・ 「なぜ～なのか。」「～は～が関係しているのか。」「どうしたら～できるか。」など、疑問形で示すことが多い。



ココがポイント！

課題の設定は、次のような観点から考えると良いと思います。そのためには、指導事項の正しい理解と十分な教材研究が必要です。

- ① 既習事項とのズレがある
→児童生徒が、疑問を感じるもの
- ② 意見の対立や拮抗が生じる
→児童生徒が、もう少し考えてみたいと感じるもの
- ③ 児童生徒が自ら解決するには、適度な壁がある
→児童生徒が、解決の見通しをある程度もてるもの
- ④ 児童生徒の素朴な疑問や驚き、憧れから生み出す
→児童生徒の興味・関心や意欲を高めるもの



「振り返り」が「まとめ」の繰り返しになってしまう…。

「まとめ」と「振り返り」は役割が違います。「まとめ」は、追究した「課題」に対する答えであり、「振り返り」は、児童生徒に本時の学びを自覚させるためのものです。



「振り返り」では…

個々の児童生徒の学びの状況について確認できる「振り返り」を工夫しましょう。（※「主体的に学習に取り組む態度の評価」にもつながるように）

【例】

①学習のプロセスや成果を振り返る

- ・この学習で、何がわかったか。
- ・この学習で、何ができるようになったか。

②これまでの経験や学習と関連付ける

- ・身の回りの事象や日常生活とどのような関連があるか。
- ・既習事項とどのような関連があるか。

③次回の学びへつなげる

- ・今後使ってみたい、もっと調べたいことは何か。
- ・改善には何が必要か。



「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（中学校国語）」には「主体的に学習に取り組む態度」の評価の参考になる「振り返り」として以下の項目が紹介されています。

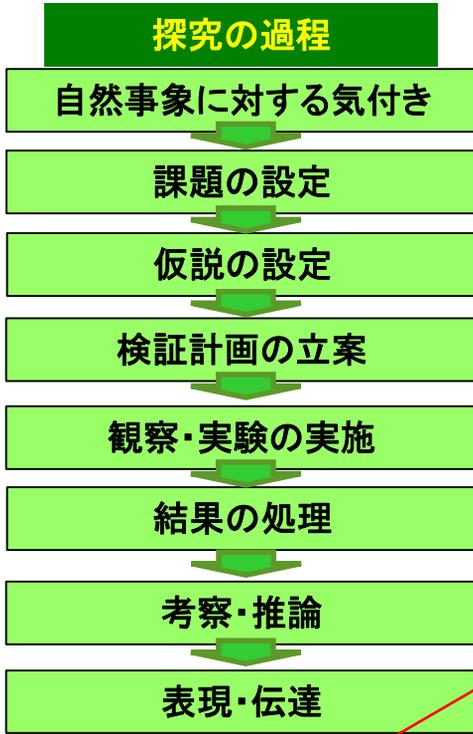
- ア 本時（や本単元）の学習で意識したこと。
- イ 本時（や本単元）で身に付いた力やできるようになったこと。
- ウ 本時（や本単元）で課題を解決するために試行錯誤したこと。
- エ 前時まで学習したことで、本時の学習に役立ったこと。
- オ 本時（や本単元）で工夫しようとしたが、十分ではなかったこと。
- カ 本時（や本単元）で学習したことで、今後の学習や生活の中で生かせそうなこと。

実験や実習の授業は、1時間完結でするのが難しい・・・。



「新大分スタンダード」における「1時間完結型」の考え方にも注意が必要です。

<理科の例>



新たな疑問・次の問題解決へ

新大分スタンダードとの関連		
1時	めあて	
	課題	
1時	仮説の設定 検証計画の立案 観察・実験の実施 結果の処理 考察・推論	
	まとめ	
	振り返り	
	2時	課題
		仮説の設定 検証計画の立案 短時間のまとめ・振り返り 前時の課題の確認 観察・実験の実施 結果の処理 考察・推論
	まとめ	
	振り返り	



ココがポイント！

探究の過程を通じた学びを1単位時間で計画するのか、複数時間で計画するのかは、授業者の指導のねらいによって変わってきます。それに応じて「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の設定の仕方も変わります。

例えば、2単位時間で計画する際には、1時の終末は短時間で振り返ったり、2時の導入は前時から継続している課題を確認したりするだけでよい場合もあります。

2_板書の構造化

*思考を整理したり促したりする板書、思考の過程を振り返ることができる板書

「**構造的な板書**」は、それをツールとして対話的な学びが生まれたり、そこから深い学びにつながったりすることが期待できます。

また、「自分の考えをまとめられない」「何を考えればいいのかわからない」などの児童生徒であっても、構造化された板書を手掛かりに、思考を整理したり促したりすることによって、自分の考えをもてるようになる場合があります。

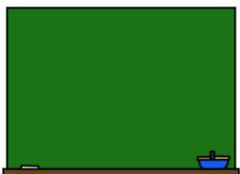


ココがポイント！

板書で大切なのは、「**児童生徒にとって必要なことが書かれているか**」です。

- 【例】
- ・めあてや課題など、何を学ぶのかを明確に示したものの
 - ・めあての達成や課題の解決に必要な材料
 - ・教科の資質・能力の育成に必要な知識や学び方
 - ・学習したことのまとめ

などがわかりやすく書かれているかを確認してみましょう。



「**構造的な板書**」の考え方は、黒板だけでなく、大型ディスプレイを使う場合にも当てはまります。ただし、大型ディスプレイは、一度示した画面が授業の最後まで残ってないことが多いため、例えば、めあてや課題は黒板に、課題解決に係る児童生徒の考えは大型ディスプレイに示すなどの工夫が必要です。

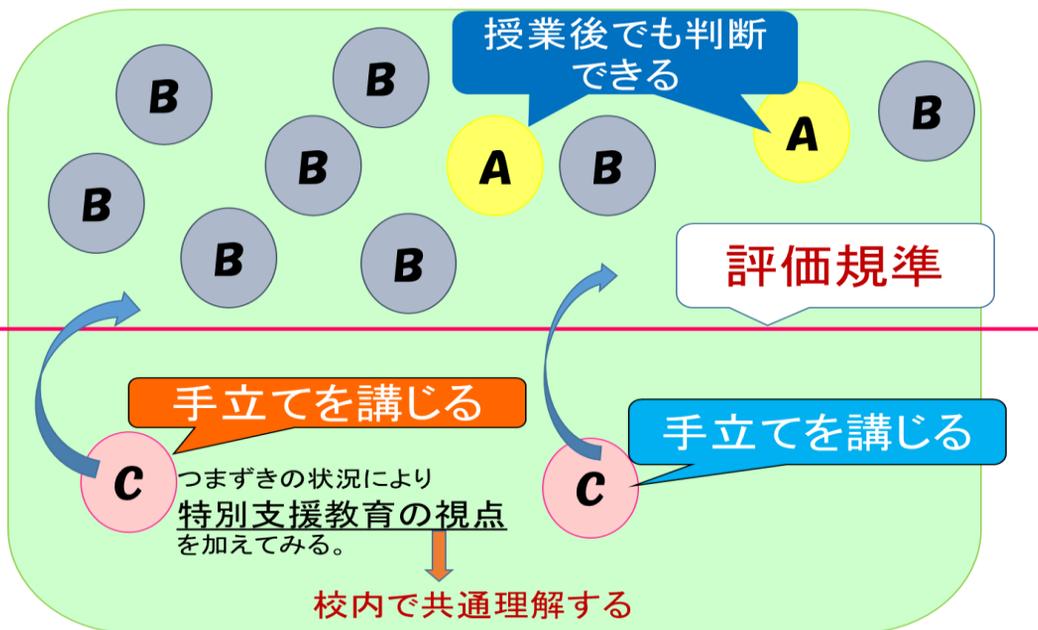
20ページの「ココがポイント！」も参考にしてください。



3_習熟の程度に応じた指導

- * 「具体的な評価規準」に基づく確かな見取り
- * 「努力を要する状況」の児童生徒に対する手立ての工夫

「新大分スタンダード」における、「習熟の程度に応じた指導」の考え方は、特に、低学力層の児童生徒に確実に資質・能力を育成する上で重要です。下の図は、授業中の教師の見取りについて具体的に示したものです。



学習指導要領には、次のように示されています。

学習指導要領 第1章 総則

第3 教育課程の実施と学習評価 2 学習評価の充実

- (1) 児童（生徒）のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、**各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する**観点から、単元や題材など、内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、**学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かす**ようにすること。

評価というと、多くの人が総括的評価をイメージすると思いますが、学習指導要領の記述からも、**形成的評価が重要**であることが読み取れます。



ココがポイント！

「習熟の程度に応じた指導」を踏まえた授業改善を進めるため、以下について、確認をしましょう。

- ☑ 児童生徒の学習状況を確実に把握するための具体的な評価規準を設定する。

※どのような児童生徒の姿が見られれば、目標を達成したと判断できるか

- ☑ 全ての児童生徒が授業内で目標を達成できるよう、適切なタイミングで児童生徒の学習状況を見取る「形成的評価」を実施する。
- ☑ 形成的評価により、設定した評価規準への到達が困難と判断した場合には、該当の児童生徒に適切な手立てを講じたり、学習展開を柔軟に変更したりする。



形成的評価で見取った「努力を要する状況」の児童生徒に対する手立てについても、資質・能力育成の観点から十分な検討が必要です。

書	2段落 ぎもんの答え	1段落 ひっ者のぎもん	段落
り	①うめほしは、() はたらしをします。 () するからです。 ()を	を食べるのでしよう。 () それは、うめほしが、わたしたちの体にとって、いろいろな	食べ物 ・うめほし ・日本ではむかしから食べられてきました。 ・わたしたちは、

【エラー例】

- ・児童生徒がつまづかないように作られた、丁寧すぎるワークシート
- ・確認するだけで、解答(正答)に誘導されるヒントカード



思考・判断する必要がなく、手立てを講じることが児童生徒の学びを妨げる要因になっている

4_生徒指導の3機能を意識した 問題解決的な展開

*各教科の見方・考え方を働かせて展開する「課題設定 → 情報収集 → 整理・分析 → まとめ・表現・交流 → 振り返り・評価」等の学習過程の繰り返しの中で行われる

- ・知識の関連付け、問題の発見・解決、情報を精査した考えの形成、思いや考えに基づく創造
- ・様々な人々との対話・協働による自分の考えの深化・拡充



まずは、生徒指導の3機能について、確認しましょう。

「生徒指導の3機能」を意識するとは…

自己決定 の場を与える

☞ 課題に対して追究し、自分の考えをもたせる



自己存在感 を与える

☞ 個が活躍（発表や発信）できる機会を設定する

☞ 個に応じた手立てにより、主体的な学習参加を促す

共感的人間関係 を育む

☞ 他者を認め合いながら交流し、新しい考えを創造させる

授業づくりにおいて、単元を見通した「問題解決的な展開」を意識すると、対話によって思考を広げたり深めたりする活動や、身に付けた資質・能力を活用・発揮しながら思考する場面が無理なく位置付けられ、主体的・対話的で深い学びの実現へとつながることが期待できます。



ココがポイント！

学習指導要領解説総則編では、「主体的・対話的で深い学び」は、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して授業改善を進めることが重要であると示されています。

前ページの「生徒指導の3機能」についても、1単位時間に全てを詰め込んで行うというものではありません。

学習活動や学習内容に合わせて、それぞれの場면을単元の中で適切に位置付けることが大切です。

【理論編】はここまでです。次ページからは、「新大分スタンダード」の理論を落とし込んだ授業づくりについて、具体例を挙げて説明する【実践編】です。



【実践編】

「新大分スタンダード」に基づいた授業改善は、単元や内容のまとまりを見通した授業づくりで取り組まれるものです。そのため、まずは、**それぞれの実践が、しっかりした単元構想のもとに行われているか**を確認することが重要です。



下は、基本的な内容を示していますが、教科毎にその特性を踏まえた作成ポイントがあります。詳細については、義務教育課のウェブサイト「早わかり！単元計画の作成手順」を確認してください。

<単元計画の作成手順>

Step1 単元で取り上げる指導事項（指導内容）の確認

- ・年間指導計画や児童生徒の実態等を基に、単元で取り上げる指導事項を確認します。
- ・上の「指導事項の確認」は、学習指導要領に記載されている指導内容の具体を確認することも含みます。教科書が授業づくりのスタートにならないようにすることが大切です。

Step2 単元の目標を設定

- ・Step1で確認した指導事項をもとに、単元の目標を設定します。

Step3 単元の評価規準の設定

- ・「主体的に学習に取り組む態度」については、「粘り強い取り組みを行おうとする」側面と「自らの学習を調整しようとする」側面の双方を適切に評価できる評価規準を設定します。

Step4 単元の指導計画と評価の計画の決定

- ・「指導と評価の計画」の作成では、どの時間に何を評価するのかについて、主たる学習活動の流れに沿って整理します。
→「指導と評価の計画」が整ったら、各時間に評価する内容が「単元の評価規準」に対応しているかどうかを確認することが大切です。
また、児童生徒全員の学習状況を記録に残す場面を精選するとともに、どのような方法で評価するのも確認しておきましょう。

指導と評価の計画（例）

時	主な学習活動	指導上の留意点	評価
1	○SDGsを題材にした意見文を読み、学習の見通しをもつ。 ○各自が取り上げたいテーマとそれに対する意見を考える。	・これまでの「書くこと」の学習を想起させ、学習計画を立てさせる。 ・自分たちが行動の主体であることを意識させて、取り上げたいテーマとそれに対する意見を考えさせる。	
2	○意見文を書くために必要な資料及びその収集方法について考える。	<div style="border: 2px solid red; padding: 2px;">第1時で扱った素材文を再読し、意見と根拠をマーカーで色分けさせる。</div> ・意見に対する根拠の書かれ方が異なる意見文を示し、根拠の示し方には様々あることや、根拠の適切さとはどういうことかについて考えさせる。	[知識・観察・ ・①マ ている 所とな してい
3	○意見とそれを支える根拠をワークシートに整理する。	・意見を支える根拠として必要な情報を収集させ、ワークシートに整理させる。 ・グループで互いの意見が確かな事実や解釈から導き出されているかを検討させる。 <div style="border: 2px solid red; padding: 2px;">グループ活動での意見を踏まえ、ワークシートを見直し改善させる。</div> ・必要に応じて、新たな情報の収集をさせる。	[思考・ワークシ ・グルー 自分の考 ように、根拠を見直したり説明 を加えたりしているか確認する。
4	○構成を考え、意見文（400字程度）を書く。	・前時に整理したワークシートをもとに、意見文の構成を考えさせる。 ・ワープロソフトを使って意見文を書かせ、意見と根拠を色分けさせて、根拠が適切かどうかを確認させる。 ・確認後、修正が必要な箇所については、見え消しで修正させる。	[主体的に学習に取り組む態度] 観察・意見文・ワークシート ・自分の意見が伝わる文章になるように、進んで、根拠や具体例が適切かどうかを見直そうとしているか確認する。 [思考・判断・表現] ・根拠の適切さを考えて説明を加えるなど、自分の意見が伝わる文章になるように工夫しているかどうかを確認する。
5	○互いの意見文を読み合	・意見を支える適切な根拠が示されている	[知識・技能]

指導と評価の計画作成にあたっては、目標として設定した資質・能力を確実に身に付けさせるための工夫も必要です。



- ☑ 基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、その確実な習得を重視すること
- ☑ 主体的に学習に取り組む態度を育成する観点から、児童生徒が自ら試行錯誤したり再検討したりする場を保障すること

Step5 評価の実際と手立ての想定

- ・それぞれの評価規準について、実際の学習活動を踏まえて、「Bと判断する状況」を具体的な児童生徒の姿で想定するとともに、「Cと判断する状況」の児童生徒に対する手立てを想定します。



評価の実際を想定する場合に、授業者が明確にしておくことについても確認しておきましょう。

- ☑ ①いつ（学習場面） ②何を（評価材） ③どのように（Bと判断する児童生徒の具体的な姿）
- ☑ グループで成果物を作成したり複数名で言語活動を行う場合には、個の資質・能力の定着をどのようにして見取るのか

<問題解決的な展開の工夫>

単元構想においては、「新大分スタンダード」の4つ目の視点にある「問題解決的な展開」になっているかどうかを確認することが大切です。

社会科の例 B 世界の様々な地域(2)世界の諸地域 ⑥オセアニア

講義型の授業

■学習内容を伝え、地図で場所を確認し、自然環境について説明

- ・オセアニア州の特色を理解する学習である。
- ・オーストラリア大陸と太平洋に広がる島々で構成。
- ・オセアニア大陸の約2/3は乾燥しており、温帯のニュージーランドや熱帯のパプアニューギニアなどがある。

■産業と貿易について説明

- ・オーストラリアやニュージーランドは農業が盛んで輸出も多い。
- ・豊富な鉱産資源を輸出。
- ・以前はイギリスとの関係が深かったが、今はアジアとの結び付きを強めている。
- ・さんご礁など、豊かな自然を利用して、観光業が盛んである。

■歴史について説明

- ・かつてはヨーロッパが進出。アボリジニやマオリなどの先住民がいる。
- ・かつては白豪主義という政策がとられていた。現在は多文化社会を築こうとしている。

→指導者がこれまで学んだことをまとめる。もしくは生徒にまとめさせる。

問題解決型の授業

■単元の**学習課題**を設定

- ・日本の自動車企業がオーストラリアの自動車製造業から撤退し、2017年に自動車製造業が消滅した新聞記事を読ませ、疑問をもたせる。
- ・**疑問や意見等を出し合い、単元の学習課題を設定する。**

「なぜ資源豊富なオーストラリアで、自動車製造業は衰退したのか。」

■**課題解決の見通し**を持つ

- ・予想や仮説を立てる。
- ・調査方法、追究方法を吟味する。
- ・学習計画を立てる（以下を調べる）。
 - 1 地球上の位置や自然環境
 - 2 諸産業と貿易
 - 3 歴史と人々の結び付き
 - 4 これからのオセアニア州

■課題解決に向けて**調べる**

- ・地図帳を用いて調べる。
- ・端末を使い、自動車関連企業のHPや新聞記事等から調べる。
- ・自動車関連企業で働く人から聞き取る。

■**社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察**

- ・**多面的・多角的に考察する。**
- ・**話し合う（討論等）。**

■**考察したことをまとめる**

学習課題を振り返って結論をまとめる。

- ・結論について他の生徒と話し合う。
- ・学習課題についてレポートなどにまとめる。

■**学習を振り返って考察**

- ・自分の調べ方や学び方、**結果を振り返る。**
- ・**学習成果を学校外の他者に伝える。**
- ・**新たな問い（課題）を見出したり追究したりする。**

「問題解決的な展開」を意識した単元構想により、知識の関連付けや他者との対話・協働が無理なく位置付けられ、児童生徒の学びの深まりが期待できます。





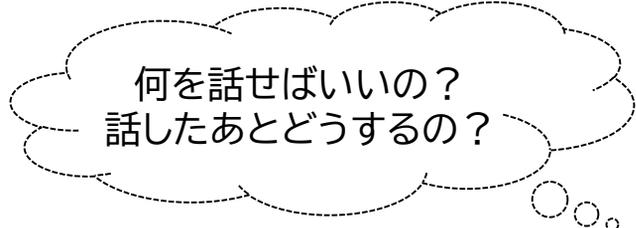
問題解決的な展開を意識して、話し合いや交流の場を設定しているけど、効果的な学習の場となっていないように思えます…。

国語科の例

中学校第1学年〔C読むこと 才〕 ※考えの形成・共有に係る指導事項

本時の展開

学習活動
1 前時の学習の振り返りと本時のめあての確認
2 課題について考える ・本文を読み、「母」の人物像が描かれている部分に線を引く ・各自で「母」の人物像をまとめる
3 班で意見を交流する
4 全体で交流する
5 本時のまとめをする
6 読み取った「母」の姿から、印象に残ったことを振り返りに書く



様々な人との対話・協働は、「自分の考えの深化・拡充」につながるように位置付けることがポイントです。



<資質・能力の育成を目指した交流の工夫>

「主体的に学習に取り組む態度」においては、「学習の調整」や「粘り強さ」を見取ることが求められています。そのことを踏まえ、資質・能力の育成に効果的な対話や協働の場を設定しましょう。



他者の意見をもとに再考

資質・能力の育成



< ICTの効果的な活用 >

GIGAスクール構想によって、配備された1人1台端末は、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実にも有効な手立てとして活用できます。

国語科の例 中学校1年〔B 書くこと ウ〕根拠を明確にして意見を述べよう。

育成を目指す資質・能力

- 比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使うこと。 [知識及び技能(2) イ]
- 根拠を明確にしながら自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。 [B書くこと ウ]
- 言葉が持つ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとすること。 [学びに向かう力、人間性等]

事例の概要 (主な学習活動)

交流をとおして
意見を作る

- ① 身のまわりの出来事から、共感したり違和感を覚えたりした体験を思い起こす。
- ② ①について、グループで交流し、体験から導き出された自分の意見を1~2文で書き出す。
*問題の解決に向けて自分たちができることを考えたり、実際に行動を促したりする意見を書くことを伝える。

資料を集め、
情報を整理する

- ③ 学校図書館やICTを活用して必要な資料を集める。
*比較や分類、関連付けなどの情報の整理の仕方や出典の示し方について理解し、それらを使うように促す。

構想メモを
作成する

- ④ 集めた情報を付箋に整理し、構想メモを作成する。

意見文を
下書きする

- ⑤ 交流メモをもとに、意見文を下書きする。
- ⑥ 下書きを交流し、「分かりやすいか」や「納得できるか」などの視点で助言する。

意見文を
読み合う

- ⑦ 助言を参考にしながら意見文を作成する。
- ⑧ 互いの意見文を読み合い、相互評価する。
*「書き手の考えが伝わるか」「根拠は明確か」について相互評価する。

「学習の個性化」
に対する手立て

興味・関心に応じた学習課題を生徒自身が設定することで、今後の学習が最適となるよう各自で調整させる。

「指導の個別化」
に対する手立て

支援が必要な生徒には、中学生による新聞の投稿を保管した共有フォルダを活用させるなど、情報を制限することで学習に取り組みやすくなるよう工夫する。

資質・能力に応じ、インターネット、新聞、図書等様々な情報収集ができるよう工夫する。

支援が必要な生徒には、関連図書の活用等について学校司書の支援を行う。



「Bと判断する状況」に該当しない生徒には、共同編集機能を活用したコメントの入力など、教師による支援を重点的に行う。

「B(A)と判断する状況」の生徒にも、適宜、教師によるフィードバックを行うことで粘り強く学習に取り組ませる。



ICTは、様々な学習活動で活用することができ、「新大分スタンダード」に示す4つの授業改善の視点の全てと関わるものです。
ただし、ICTを活用した授業改善を進める際には、児童生徒の実態を踏まえるとともに、下に示すとおり、「育成すべき資質・能力を見据え、授業のねらいに即したICT活用」を意識することも大切です。

育成すべき資質・能力を見据え、授業の「ねらい」に即したICT活用

ICTの効果的な活用

- *各教科等の特質や学習過程を踏まえた活用
- *子どもの学びを広げ、深める活動で活用(思考の可視化、意見交流、学習の記録等)
- *子どもの興味・関心、実態に応じた活用

子ども主体の学びを支援
情報活用能力の育成



ココがポイント！

ICTは、低学力層の児童生徒を支える視点からも活用が期待されますが、以下のような授業になってないか、注意が必要です。

- ▲ 活動のほとんどを端末上で行う授業
→黒板に何もかかれておらず、児童生徒の思考の過程が見えない
(授業の途中で確認することができない)
- ▲ 電子黒板等で次々と情報を投影する授業
→児童生徒が、大切なことを確認したいと思っても、残っていない
- ▲ 端末上に各自の考えを記入させているものの、全体のまとめが不十分な授業
→ノート、端末等に本時のまとめが残っておらず、本時の学びが不明瞭なままになっている(あとで確認したくてもできない)

授業改善の取組は、学習指導要領の着実な実施を通して、全ての児童生徒に対し、確実に資質・能力を育成することを目指して進められるものです。各教員には、専門家として、学習指導要領に示された育成を目指す資質・能力についての正しい理解や、児童生徒の実態の丁寧な把握、教科の特性や使用する教材に応じた授業づくりを行うことが求められています。児童生徒が「わかった」「できた」を実感できる授業を目指して、本解説と併せ、以下の資料も参考にしてください。

- ・ 「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」
<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryuu.html>
- ・ 「2020からの新しい授業づくりハンドブック【小・中学校】」
<https://www.pref.oita.jp/uploaded/attachment/2203199.pdf>
- ・ 「早わかり！単元指導計画の作成手順」
<https://www.pref.oita.jp/site/gakkokyoiku/hayawakari-tejyunn.html>



問合せ先

大分県教育庁義務教育課

〒870-8503 大分市府内町3丁目10番1号

TEL : 097-506-5519 FAX : 097-506-1795